

## 2 発生予察調査実施基準の新規手法策定事業

### 1) アザミウマ類（東日本のイチゴにおける発生調査基準の検討）

#### 1. 調査背景と目的

新たに発生し、調査実施基準が未策定の害虫について、発生動向を的確に把握する調査やその調査結果に基づく発生予察手法をとりまとめ、新たな調査基準を策定するための検討を行う。本調査では、イチゴに発生するアザミウマ類を対象に検討を行う。

#### 2. 調査方法

##### 1) 見取り法による調査

（調査地点）

県内 11 地点 22 か所の促成イチゴほ場。

（調査方法及び調査項目）

ほ場内の 4 列から計 100 株を選び、各株から 1 花ずつ開葯した新鮮な花を調査する。アザミウマ類寄生の有無を目視観察し、100 花あたりのアザミウマ類寄生花率を求める。また、各ほ場上限 20 頭程度を採集し、種構成を記録する。

（調査時期及び調査間隔）

調査は、10 月上旬から原則月 2 回行い、発生量の少ない 12 月は 1 か月間隔とする。

#### 3. 調査結果

##### 1) 見取り法による調査

調査は開花後のほ場で実施したため、調査ほ場数は 10 月上旬に 8 ほ場、10 月下旬に 20 ほ場、以降は 22 ほ場であった。10 月上旬の調査開始時から、アザミウマ類の発生が認められた。平均寄生花率は 10 月上旬に最も高く、その後徐々に減少した。一方で、アザミウマ類発生ほ場率は、10 月下旬をピークに減少に転じた。この推移は例年の動向と同様であったが、10 月上旬において発生ほ場率が低い一方で、寄生花率が高い傾向がみられ、特定ほ場で多発していることが窺える。

花上からはヒラズハナアザミウマ、ハナアザミウマ、ネギアザミウマ、ビワハナアザミウマ、アカメガシワクダアザミウマが得られ、全体としてヒラズハナアザミウマの発生が最も多かった。

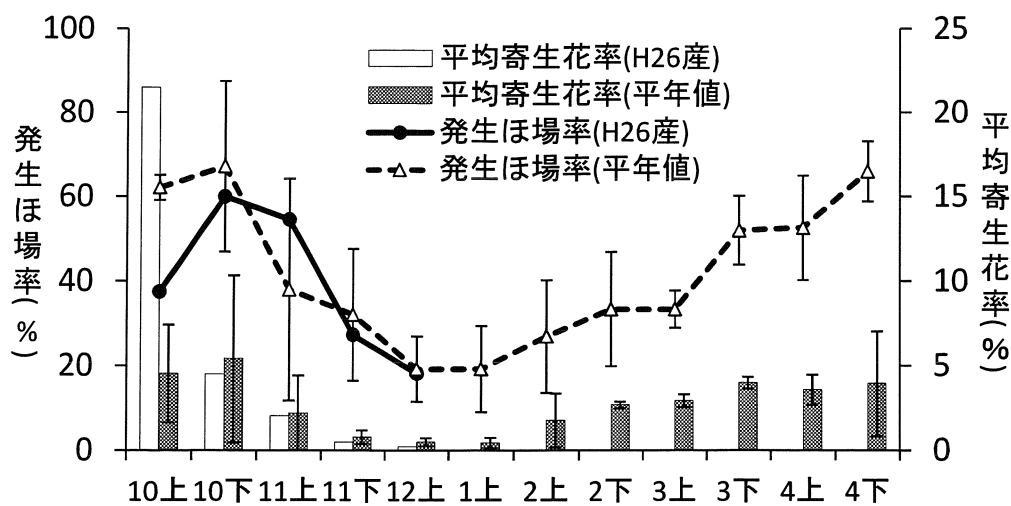


図1 イチゴほ場におけるアザミウマ類発生ほ場率と寄生花率

(平年値は平成23,24,25年産の平均値。誤差表示は標準偏差を表す)

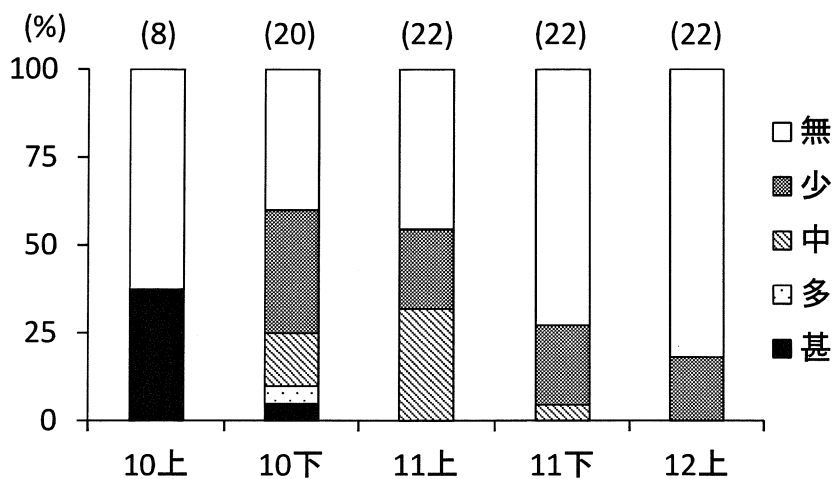


図2 イチゴほ場におけるアザミウマ類発生程度

(括弧内は調査ほ場数を表す)

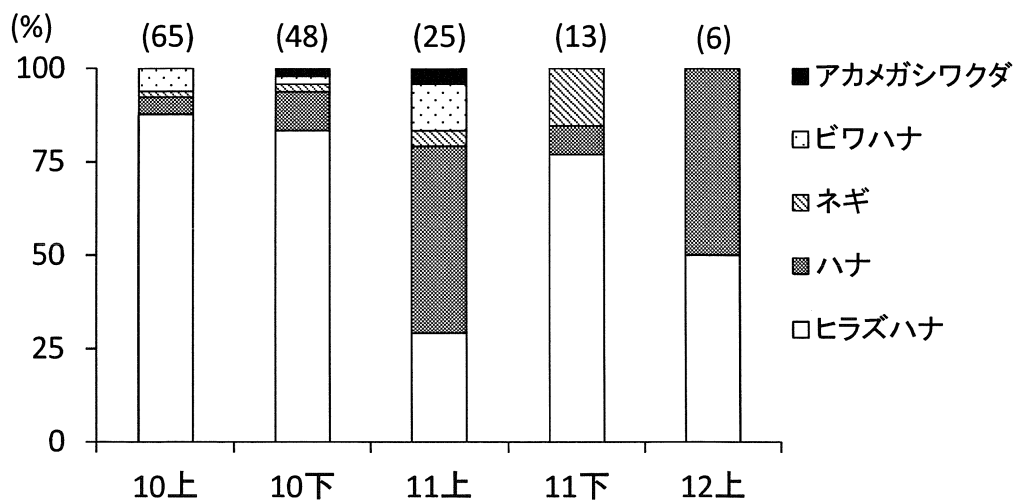


図3 イチゴほ場におけるアザミウマ類の種構成

(括弧内は採集個体数を表す)

#### 4. 考察

発生ほ場率は、平年と同様に 10 月下旬に一度上昇し、以降減少した。一方で、平均寄生花率が 10 月下旬以降に急激に低下したのは、10 月下旬以降に調査を開始した開花の遅いほ場ではアザミウマ類の侵入が少なく比較的密度が低かったこと、10 月上旬時点で多発していたほ場の大半で防除が行われたことが原因と推察された。また、10 月下旬に発生程度が多以上であった全てのほ場は 10 月上旬時点から発生が認められていた。このように、秋期の発生状況は施設ごとの開花時期によって大きく異なるため、調査施設の選定にあたり作型が偏らないよう考慮する必要がある。

調査効率については、本県ではイチゴの病害虫として灰色かび病、うどんこ病、炭疽病、萎黄病、アブラムシ類、ハスモンヨトウ、ハダニ類、コナジラミ類を葉で調査しており、花を調査するアザミウマ類については単純な調査労力の増加となる。施設内を通路の両側畦で計 100 花を調査しながら往復した場合、発生が少ない場合には 5 分程度、多発生時に 20 頭程度を吸虫管で採集しながら調査した場合には 10 分程度かかり、発生量の多少にかかわらず調査時間は大きく変わらず、事前の調査時間を推定し易いと考えられた。

#### 5. 今後の課題

なし

#### 6. 要約

イチゴの花を見取り調査することで、発生ほ場率、寄生花率について平年値との比較を行い、年次間差が明らかになった。また、秋期の発生量は作型の影響が大きく、評価には注意が必要であることが示唆された。アザミウマ類の調査は、通常のイチゴの調査に加えて 5～15 分程度の調査時間が必要となるが、発生量によって調査時間が大幅に延長することは無く、実用的であると考えられた。

#### 7. 成果の公表及び特許

平成 25 年植物防疫年報（予定）

春山ら（2013）関東病虫研報 60: 103-106.

#### 8. 引用文献

なし